論座 RONZA　科学・環境

国内外の戦争の跡地を訪ねて感じたこと

科学技術研究者は戦跡を訪ね、歴史をゆっくり考える余裕を持ってほしい

永野博　科学技術振興機構研究主幹

2019年08月13日

「戦争は人の心の中で生まれるものあるので、人の心の中に平和の砦を作らなければならない」。これはよく知られたユネスコ憲章の冒頭の句である。私は戦後の生まれだ。だから、戦争を実体験した人たちが持つ平和への強い願いを若いころは十分に共有できなかったように思う。しかし、戦争を考えさせる場所を世界各地に訪ねる経験を重ねることによって、自分が変わってきたと実感している。

先日、北方四島ビザなし交流の訪問団の一員として同行した官僚出身の国会議員が「戦争でこの島を取り戻すのに賛成ですか、反対ですか」などと大声で参加者に聞いた件には心底驚いた。本人の資質はもちろん問題だが、日本の中で、戦争、平和について日常の中で議論する機会がないことにも一因があるのではないだろうか。この点に私は強い危機感を持つ。

政治家はもちろんのこと、科学技術研究に携わる人々も、意識して戦争の実像を学ぶ機会を増やすように呼びかけたい。科学技術が戦争と表裏一体の関係で進歩してきたのは事実である。だからこそ、過去の戦争の記憶を呼び覚ます場所を機会があれば訪問し、歴史をゆっくり考える余裕を持ってほしいと思う。

見渡す限り並ぶ白い十字架

私が初めて戦争を考えさせられる場所として深い印象を得たのはフランスのヴェルダンだ（1977年）。たまたまドライブで通りかかり、ここが世界史で習った記憶のある第一次世界大戦のフランスとドイツの激戦地、ヴェルダンかと思いつつ展望台に行くと、見渡す限り、気の遠くなるほど遠くまで白い十字架が並んでいた。これを見た瞬間、こんなことが起こってはいけないという強い精神的な圧迫を受けた。

アウシュビッツのガス室の前

同じころ、当時住んでいたミュンヘン近くのダッハウという町にあるナチスの強制収容所を見に行った。いろいろ見たはずだが、記憶にあるのは米軍により解放された収容所から、痩せこけた人々が出てくるところを撮影した動画だ。

そのようなこともあり、アウシュビッツにも行ってみたいと思っていたが、その機会はなかなか来なかった。ついに2009年、ポーランドの古都、クラコフであった経済協力開発機構（OECD）の会議に参加するという偶然に恵まれた。アウシュビッツはクラコフの近郊にあり、会議終了後にさっそく出かけた。「労働は喜び」と書かれた門をくぐると、映画や報道で何度となく見た光景が広がっている。いま、付き合っている親切なドイツ人からは考えられない戦争の狂気をいやというほど考えさせられる場所だった。

アウシュビッツの広大な敷地に復元された数棟の収容所棟

収容所内部

中国で見た悪名高い731部隊跡

数年後、やはりたまたま出張に行ったのが中国、ハルビンだ（2013年）。ここで訪ねなければいけないと思ったのは、日本軍が細菌兵器の開発を行った悪名高い731部隊跡だ。

当時の建物の一部は復元され、多くの展示もあったが、私の印象に残ったのは、当時の従事者が終戦直前に日本に戻り、その後、日本で重要なポストについていることだった。

南京にはその翌年に行った。30万人が被害にあったということは大きく書いてあったが、あとは淡々と戦争被害の展示がされているというのが私の印象である。

ハルビンにある日本軍731部隊の後

リニューアルされた広島の平和記念資料館には、大型連休中に長い行列ができた＝2019年4月30日、広島市中区、宮崎園子撮影

外国の施設を見ているのに、日本で戦争を考える施設を見ていないのはおかしい。オバマ大統領の広島訪問の前にというわけではないが、その前年の2015年に広島の原爆ドームと平和記念資料館を訪問した。ここでは、平和を祈らなくてはいけない気持ちを強く起こさせられた。

2016年には沖縄で平和の礎を訪ねることができた。沖縄の悲劇は語りつながれなければいけない。ひめゆりの塔を見学した時には、当時、女学生として居合わせた方から話を聞くことができた。残念ながら対馬丸記念館は休館日で見学することができなかった。

ユネスコ活動やSDGsなどを利用してもっと戦争について考えよう

科学技術行政に長年たずさわった私は、やはり戦争と科学技術の関係が気になる。最近の例では、インターネットもGPSも、もとはといえば、米国の国防研究予算でスタートしている。だからといって日本の防衛研究予算を増やそうという発想は、私の中からは出てこない。

海外の戦跡を訪ねるのは、誰でもができることではないだろう。しかし、考える機会はいろいろと作れる。ユネスコの精神を地道に実現しようという活動を盛んにすることも一案だし（世界遺産ばかりがユネスコではない）、現在話題になっている国連の2030年を目標とするSDGs（持続可能な開発のための2030アジェンダ）の中にも16番目の目標として「平和と公正をすべての人に」が入っている。SDGsは教育にも企業にも浸透し始めているので、SDGsに言及する際には16番目の目標である平和に対してもどう貢献していくのかを述べてもらうのもよい。

科学技術の研究に携わる人々に対しては、これまでの戦争の歴史を咀嚼したうえで人間としての気持ちを周囲に語るようにしてほしいと思う。自らの研究開発の必要性についても、そのように語れば、科学技術研究に対する関心、親近感、支援も高まり、それが政府、立法府をも動かし、ひいては科学技術研究に対する多様な財政支援も活発になるのではないだろうか。

コメント0件　並び替え 最新

コメントを追加...

Facebookコメントプラグイン

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.